
ワープマシン

脳好き人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワープマシン

【著者名】

ノード

【作者名】
脳好き人間

【あらすじ】

『ワープマシン』のせいで、一人の研究者が娘のことを想い、悩んだりする話。

世の中は疑問で満ちています。

時代は進歩した。人は食事をしなくても機械を装着するだけで生きていくようになつたし、『ワープマシン』が出来てからは好きな場所にいつでも行けるようになつた。

まあ、その『ワープマシン』を開発したのは自分なのだがな。自慢ではないが、今では携帯電話と同じくらいに普及している。

「おとーさん、私もわーふしたいよ。かいはつしゃであるおとーさんの娘が一回もわーふしてないなんて、論理的におかしいよ」

娘の声で、我にかえつた。しまつた、また考え方をしてしまつていたな。いけないいけない、今は夕食時ではないか。久しぶりに帰宅したから気がつかなかつたが、我が家は機械をあまり使わないのをルールにしており、食事を摂取するのだった。

それにしても論理的に、か。この子がもつと小さかつた頃、事故で死んでしまつた妻の口癖も、論理的に、だつたな。

この子が初めて言つた言葉も論理的、だつたのには驚いたが。他の言葉を喋るようになるまで、笑いを堪えるのが大変だつた。

「ちよつとおとーさん、聞いてるの?いや、聞いてない。研究者である私にはわかるのだ」

「済まない、考え方をしていた。もう一度言つてくれ」

「かいはつしゃの娘がわーふしたことないのは、論理的におかしいつて言つたの。私もわーふしたいの!」

ああ、そういう話しだつたな。しかし、ワープか。

「ワープは駄目だ。理由はお前が大きくなつたら教える。それまで
は我慢してくれ。頼む」

なるべく誠意をこめて頼むと、不満そうにしつつも引き下がつて
くれた。流石は自慢の娘だ。

「おとーさん、じゃあ、一つだけ質問してもよいだらうか?」

「ああ、いいぞ」

「どーして大きくなるまで教えてくれないの? 簡潔に述べてください」

「…………済まない。だから、大きくなるまで待つてくれ。そうだ、
お前の好きなお菓子おもちゃを買って」

そう言い、足早にその場から立ち去つた。

研究者である自分も家ではただの父親だ。娘に嫌われたくない。
よつて、理由を説明することは出来ないのだ。

人一人いな道を歩いていると改めて実感する。皆が『ワープマ
シン』を使い、わざわざ自らの足で移動する人はいなくなつてしま
つたのだと。

コンビニに着くと、風船飴と書かれているプレートを押し、カー
ドをかざした。これで、家に商品が届いていることだらう。

「も、もしかして貴方は、あの『ワープマシン』を開発した方じや
ありませんか?」

知らない人に話しかけられた。まあ、自分のことを知っているのなら、この人も同業者なのだろう。

「そうですが、何か？」

「や、やつぱりそうですか。あ、あの、ずっと『ワープマシン』の開発者さんに聞きたいくつてたことがあるのですが、ようじいでしうが？」

「いいですよ」

研究者である自分も、人の子だ。こんなに目を輝かせている人の頼みを断るのは難しい。

「やつた！……ええと、『ワープマシン』の横に付いている箱みたいな物、何が入ってるんです？」

「……材料だよ」

「材料？……ああ、なるほど」

「君は、生まれてからどれだけの時間を生きている？」

「は？……一十年くらい、ですか？」

「ふん。一十年くらい、か。

「君、長生きしたいのなら、たまには徒歩で移動するべきだ。自分は徒歩で帰る。では」

絶対に一歳未満である若者に別れを告げ、立ち去った。

皆、自分が開発してしまった『ワープマシン』がどういう仕組みなのかを理解しているはずなのに、平氣で使う。自分には全く理解できないことだ。

昔冗談半分で作った『遠距離人間コピー機』が、まさか『ワープマシン』として普及するとは。想定外だつた。

人間の隅々までを完璧にスキヤンし、データを送る。スキヤンした物、いや者をデータ転送先で組み上げる。それが、自分の作った『遠距離人間コピー機』だ。

もつとも、それを商品化することなど少しも考えておらず、それを上司に見せた目的は、自分の実力を知つてもらうことだつたのだ。

なにしろ、人間をスキヤン出来る程の光線を浴びるのだから、使用した人間は細胞がズタズタになる。つまり、死ぬのだ。

そもそも人間のクローンを作るのは世界共通のタブーだ。本当に実用化されるなんて思うはずがない。

しかし、いつの間にか『遠距離人間コピー機』は、『ワープマシン』として発売されていた。

今までの記憶もそのままの自分が転送先にいるなら、ワープしたのと同じこと、だそうだ。

恐ろしいことにそれが人類の一般的な考え方らしい。

……ふう、そろそろ家に着くな。娘はお菓子を喜んでくれているだろうか？

家に帰る度に疑問に思つ。自分は、あんな残酷な『ワープマシン』を開発したことを知られ、娘に嫌われてしまつことを恐れていますのだろうか？

それとも、知られたうえで、娘が『一般的』な考え方を述べてくる
という可能性を恐れているのだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7007y/>

ワープマシン

2011年11月21日06時54分発行